MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．１０．１７　発行元
第 407 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

歴史・時代ミステリその6

第３８５号に続いて「歴史・時代ミステリ」の第６弾。一作家一作品と思って選んでいるのだが、だんだん選択が難しくなってくる。歴史を得意とする作家はある程度限られているからだ。ということで３冊。

現在から歴史を振り返る

今回取り上げた３作。右の『東海道五十三次殺人事件』は現在を舞台にしたもの。現代から過去の歴史の謎を推理するミステリもそれなりに数多く書かれている。いろいろな学術的な研究書も参考文献として使えるので、比較的書きやすいのかもしれない。「殺人」など事件的な「謎」はなくても、物事の裏側に存在する純粋な「謎」はたくさん考えられるから。

下に取り上げた『猿丸幻視行』は、半分だけ過去を遡るという特殊な手法。二重の楽しみと捉えることができるかもしれない。完全なタイムマシンにしてしまえば、また描き方は大きく変わると思うけれども。

一番下の『平城京殺人事件』は舞台そのものがその当時という時代小説。日本ではミステリ要素をまったく含まない「時代小説」は大きなジャンルになっている。最近は出過ぎのように感じる時もあるけれども。歴史という事実の土台があり、その上にフィクションを積み上げられる点が作家としては都合がよいのかもとも思う。

若い人たちにとってどうなのだろうか。どの程度興味があるのだろうか。明治、大正、昭和…。

風野真知雄「東海道五十三次殺人事件」

２０１１年ジョイノベルス。『歴史探偵・月村弘平の事件簿シリーズ』の書下ろし第一作になる。このシリーズは現在を舞台としているが、テーマ・題材が歴史関係になっている。現在までに『縄文の家』『信長・曹操』『おくのほそ道』『坂本龍馬』『東京駅の歴史』『葛飾北斎』と７冊出ている。

本書では、月村が雑誌の取材で訪れた箱根で女装した中年男性の死体を発見するところから始まる。月村の恋人の警視庁刑事の上田夕湖は品川で殺人事件の捜査に当たる。というわけで、東海道の宿場町で次々と起きる変死事件。月村の先祖は八丁堀の同心ということで、歴史を得意とする捜査が開始される。気軽にスイスイと読めるのが風間作品の良いところ。

井沢元彦『猿丸幻視行』

１９８０年講談社。江戸川乱歩賞受賞作品。題名に出てくる「猿丸大夫」とは九世紀後半頃の人物で、百人一首にも登場する歌人。三十六歌仙。その出自や経歴が不明で、謎が多い。伝承の上の人としての取り扱いが多く、正体についてはさまざまな説が出ている。

凝った設定になっている。スタートは「僕」として大学院生の香坂明が出てくる。「猿丸太夫伝説」を研究している。彼は謎を追究するために過去にさかのぼれる新薬のモニターに誘われる。ここはまるでＳＦの世界。彼は明治４２年の折口信夫の中に入り込むことになる。折口の頭脳を借りて謎を解明しようと試みる。ここからは折口信夫が主人公のようになっていく。最初に登場するのは友人が持っていた額。表面が猿丸額で裏面が人丸額になっていた。金田一京助も登場してくる。香坂は薬のはたらきで昭和と明治を行き来して、新しい時代の知識も得ながら猿丸太夫の正体を探ろうとする。途中、折口の目の前で友人が亡くなる事件が起き、その事件の解決を含めてストーリーは展開していく。また、「いろは歌」に隠された意味があるのではないかという暗号解読の興味もある。たくさんの文献を例示して、丁寧に分析を重ねていく作業が歴史ミステリとしての質を高めている。江戸川乱歩賞受賞の歴代作品の中でも上位に位置する出来だと思う。

深谷忠記『平城京殺人事件』

１９９８年中央公論社。最初の題名は『迷界流転―「長屋王の変」異聞』だった。私の手元にあるのは光文社文庫版。「長屋王」は天武天皇の孫。奈良時代に左大臣の地位にあった。当時の藤原氏と対立し、讒言によって自害に追い込まれた人物。本書は深谷ミステリにしては珍しい完全な時代小説で、当時の人物と舞台を使って、政変の事態の推移を描いている。

第一部は下級官吏の東人が主人公で、出世の道が閉ざされそうにな中で、「長屋王の変」に結びつく動きに入り込んでしまう様を綴っている。第二部は天武天皇の皇子である新田部が死の床で回想するシーン。「長屋王の変」が起きた時の自分の行動を振り返る。傍観の立場で何も行動に移さなかったことを悔やむ姿を描く。第三部は再び東人が主人公に戻り、「変」の時の功績で出世したものの、自分の卑怯な行動が気持ちに重くのしかかり…という流れになっている。歴史上は不明の点が多く残されている出来事に、深谷忠記なりの解釈を付け加えてフィクションに仕上げたもの。奈良、平安にかけての藤原氏台頭の歴史の一場面である。